その対策として，農業構造改善事業を始めとして，自然条件を考慮しての主産地形成の方向を打ちだすなど，積極的な動きをみせているが，今後どのように変化していくか興味あるものである。

麓集落入来郷の歴史地理学的考察

森　山　芙美子

外城制度，郷士制度によって特徴づけられた島津藩の封建的支配形態の結果，形成された麓集落は，旧薩摩藩領に百余も存在し，中世的分割知行を存続させられた兵農未分離の武士が地方の隅々にまで居住し，軍事面，行政面，生産面の各機能を果していた。その麓集落の特殊性は，この地域の地理的隔絶性と相まって他の地域とは異なった政治的・社会的意義をもたらし，特殊な集落景観と形作ると共に，今に至るまで日本の中にあって辺境地的性格を持続させ，様々の問題を投げかけている。これらの問題点の指摘と解明を志し又，これらの集落が現在を示している背景としての歴史にも重点を置き考察を試みた。この論文の主眼点は次の3つに集約できる。

1. 中心集落以外の在にも多くの武士が配置され，屯田地を形成し，麓的形態をなし，各面に大きな役割をはたしていたので，在をも含めた広範囲の「郷」でとらえようとした。
2. 従来地理学で触れられてこなかった門割制度にも注意を向け，郷士の生産活動の状況と比較しながら麓及び在の経済基盤としての農業を明らかにする。
3. 麓の明治以降の変遷にも目をむけて，麓の崩壊する側面と，なおかつ残存する封建要素のため発展をさまたげられている保守的側面とが地域に及ぼす過程をとらえようとした。

一章は麓集落の一般的性格とし，今までに解明されてきたことを示し，軍事面からみた外城の性格をはっきりさせるために地図上にその分布を示した。又郷における大ざっぱな状況を示した。

二章では入来を具体的に考察することになり，麓集落が形成されてゆく過程を考察し，今までの研究されてきたことを1つ1つ確認しかつより具体的に示したつもりである。

三章は明治以降の変遷を私なりに考えてきたつもりである。明治を迎えた郷が，行政単位としては相変らず一つの同区域を持ち，その行政機能も士族出身者で独占されたが，経済的側面からの変容は非常に著しい。半農半士だった郷士は明治維新によって必然的に農業従事者として位置づけられ，地租改正を第1の契機とした商品経済の浸透によって，まず農業内部での変化を段階的に生じせしめた。ところが日本産業の発展に伴って，もはやそれは農業内部では対応出来えず，又，士族層が子弟への教育中心主義に傾き出してからはそれまで農業政策の積極的推進者だった彼らに替って担わる者もなく，零細なまま農業が停滞し，出かせぎ離村による人口流出が急速に促進されてくる。教育を受けた士族層も都市に留まり，その成果を積極的に還元して地方文化の発展に寄与すべく態度もみられぬ。よって辺境地たる鹿児島の低位生産力地帯としての形成が出来上るわけであるし，特権区域としての麓も宅地の売却により

相当崩壊しつつある現状である。

なお麓の明治以降の変遷については，全麓の分類をして，その地域性を明らかにすることが，今後残された課題なのではなかろうかと思う。

山口県周防大島の農業地域に関する地理学的研究

吉　見　則　子

本論文では，瀬戸内西部の防予諸島に含まれる周防大島をとりあげ，島の基幹産業である農業の特色，農業地域の設定を通して，本島の地域性を導き出すことを目的とした。

第1章　地域の概観：本島は129.7 km^2 の面積をもち，瀬戸内の島では3番目に大きく，本土とは800mの距離をもって隔っている。島内・島外交通とも比較的恵まれ，隔絶性に乏しい。古くから農業を中心に開発され，現在も就業者数の50％前後を農業従事者が占め，島の経済基盤となっている。

第2章　自然環境：地形は山地，丘陵地，山麓緩斜面，沖積地，浜堤の5つに区分される。山地の高低，沖積地の広狭から島は胴体部の西半と肢節部の東半にわけられ，地形の違いが農業に大きな影響を与えている。

第3章　農業：ミカンを基幹作物とする本島では，明治初期には麦・甘藷，明治中期から昭和初期には桑，戦前の煙草・除虫菊の如く商品作物の変遷が著しかった。これは平地の少ないことによる水田作の不利なためで，導入作物は本土の経済状況を反映し，かつ収益性の大きい作物が自然環境と関連して導入された。又，平地が少ないため，傾斜地農業が促進され，戦前は畑，戦後はミカン園に利用されてる。傾斜と土地利用の間には密接な関係があり，水田は5℃以下，畑は6～15℃，ミカン園は16～25℃の所に多いことがわかった。基幹作物のミカンは気候をうまく利用した商品作物で，歴史も古く，品質もすぐれ，市場で好評を得ているが，農業技術，労働力，新興産地との競合などの点で多くの問題を残している。

第4章　農業地域区分：農業土地利用から戦前は西半の水田卓越地域と東半の畑卓越地域に，戦後は西部の水田卓越地域，中部のミカン卓越地域，東部のミカン＋畑地域に区分される。現在，西部地域は農業従事者率，専業農家率とも他地域に比して少ない。経営耕地規模は本土並みで，他の点からみても最も本土的色彩が強い。中部地域は専業農家が最も多く，純農村的色彩の強い地域で，ミカン単一経営農家も存在し，農業収入も高い。東部地域は未だ畑率が10％ぐらいで，経営耕地規模，農業収入とも少なく，島内随一の零細地である。三地域の地域差は単に景観面にとどまらず，農家経営にも存在するが，地形条件の差，本土からの距離差がこの要因としてあげられる。